

マーケット・アイ (99/7)

視点・為替市場

円ドル相場を始め、為替市場の動きを予測することは難しい。年初ユーロが誕生した時、アジア諸国などが外貨準備をドルからユーロに一部切り替えると喧伝され「ユーロ高」を予想した向きが多かった。だが見事予想は外れた。ユーロは長らく低迷し、その原因をコソボ紛争やイタリア経済の不振に求める見解が多く見られた。しかし原因はどうあれ予測が外れた事実は消しようがなかった。それを承知で円ドル市場の行方を云ってみたい。

円ドル相場は71年ニクソンショック以来308円を起点として、基調として一貫してドルに対して価値を高めて(円高トレンド)きた。しかし、そのトレンドは95年4月の80円(正確には79円75銭)を以って終了した。つまり相場の大転換が起こった。私はそう考えている。現在の円高は、そうした視点で見れば短期的な傾向である。しばらくは円高が続く。100円近く迄行く可能性がある。しかし、長期的に見た場合、この円高は円安トレンドの中にある動きであると考えている。

為替は何によって動くのか。貿易収支か、資本収支か、それともヘッジファンドに代表される投資的資金の動きか。いずれにせよ長期的には経済のファンダメンタルズ(基礎的条件)という奴がそれを決めることになる(と思う)。

株式手数料、爆裂

先週証券業界に衝撃が走った。DLJディレクト証券(最近設立された外資合併ディスクラウトブローカー)が、株式委託手数料が完全に自由化される10月以降の手数料体系を公表したのだが、その余りの低価格は証券業界を震撼させた。次の比較表を見て欲しい。

売買代金	現行手数料	DLJ手数料	割引率
100万円	11,500	1,900	83.5%
500万円	47,500	1,900	96.0%
1000万円	82,500	1,900	97.7%
2000万円	140,000	2,400	98.3%

(単位:円、DLJはネット成行注文の場合)

株式取引を行ったことのない人でも、このDLJの新手数料がいかに激しいものであるか判ると思う。これが英国や米国で起こった現実でもある訳だが、既存の手数料体系の中で食んで

いる方々は大変だと思う。だが同情はされても、実際の取引は、かなりの速度とかなりの割合で「新しい現実」に移行して行くことになる。最大手の野村証券も後を追うように新手数料体系を公表したが、残念ながら見る気にもなれなかった。

持合い解消、本格化

27日の日経新聞に大企業の銀行株大量売却の事実が伝えられていた。株式持合いの解消行動が、いよいよ待たなしで本格化しているようだ。

この持合い解消は、株式市場にとってグッド・ニュースである。一般的に、持合い解消は株価抑制要因と云われる。大量の持合い株が市場に放出されるのだから株価の上値を押えると考えるのは当然である。しかし重要なのは、融資と株式保有の両面によって銀行が企業を間接的に統治するという企業統治システムに変化が起こっているという事実である。これをグッド・ニュースと云わずして何をグッド・ニュースと云えばいいのだろうか。株価は上昇して当然だと思う。

さくら銀行がネット銀行

さくら銀行が富士通と組んでインターネット銀行を設立するという報道は、正直云ってガッカリした。ネット銀行が姿を見せること自体は歓迎すべきことであるが、その第1号が“あの”銀行であることが気分を滅入らせる。

別段さくら銀行に何の恨みもないし、さくら銀行の前進的な行動を否定する気持ちもないが、私にとって“あの”銀行は何時まで経っても“あの”銀行なのだ。気分的なものかも知れないが、ネット銀行は新しい力によって実現して欲しかった。

長銀と日債銀

長銀や日債銀の経営層が粉飾決算容疑で逮捕された。当人達に犯罪意識は無かった筈で、誠に以ってお気の毒なことではある。

あらゆる恐慌は金融恐慌で終わると歴史家が云っているが、日本を代表する大手銀行が相次いで破綻しその経営陣が牢獄に繋がれるという姿は、日本の平成恐慌(!?)が終焉したことを示すと見ていい。そんな目で長銀・日債銀の解体劇を見ると、前途は決して暗くはない。